

### 第3節 旧「甲州街道」について

#### (1) はじめに

3 次及びぶ長峰砦跡の発掘調査の中で、とりわけ第1次と第3次の調査で、旧「甲州街道」の遺構が、図らずもというかたちで確認された。そこで本報告書の最後に、その遺構の状況などを見つめ直し、すでに明らかにされている近世及び一部近代にかけての交通史を踏まえながら、若干の検討をしておきたい。

いま「図らずも」と述べたが、中世の城郭の調査を行う以上、事前の課題整理の中で、砦と交通の関連のことは問題設定の中に置かれてはいた。そして中世の交通にある程度沿った砦の位置づけを予想し、取り組んだつもりではあった。が、実際に旧「甲州街道」の、遺構としてのそれに具体的に遭遇するとは予想していなかった。そのために、これが五街道の一つの遺構なのだと理解されるまでは、多少の時間を要した。

これまで本報告書では、旧「甲州街道」と表記してきたのは、一般的に親しまれている「甲州街道」という、東京と甲信地方を結ぶ現在の主要道路（あるいは国道20号線）に対し、その旧の道路という意味合いで用いてきた。少し歴史学的でないところがある用語である。では、歴史的に見た「甲州街道」はどうなるのだろうか。

#### (2) 「甲州街道」の歴史の中で

すでに第2章などで述べたように、関東と甲斐府中方面を結ぶ道は古い時代から存在したと考えられるが、この点についての具体的史料は乏しい。

江戸幕府の創設と共に、江戸から各地に向かう主要幹線道路としていわゆる五街道が整備された。「甲州街道」もその一つで、信州下諏訪の中山道との合流までの延長55里の道程に、45の宿駅（駅数には諸説ある）が置かれた。慶長9（1604）年頃までに一通りの整備がなされたと見られているが、当初の呼称は「甲州海道」であった。それが海沿いの道ではないとの理由で「甲州道中」と改称されたのは享保元（1716）年のことで、以来公式にはこの名称が用いられている。

江戸時代には、軍事的な政策上、一般の街道は人や駄馬などの通行のみで、車の通行は押さえられていた。そのためが国古代の律令政府が目指した直線的な道路などとは違う、自然地形に従った線形で、当然、現代の自動車社会の中で考えられるイメージとは大きく様相を異にするものであった。

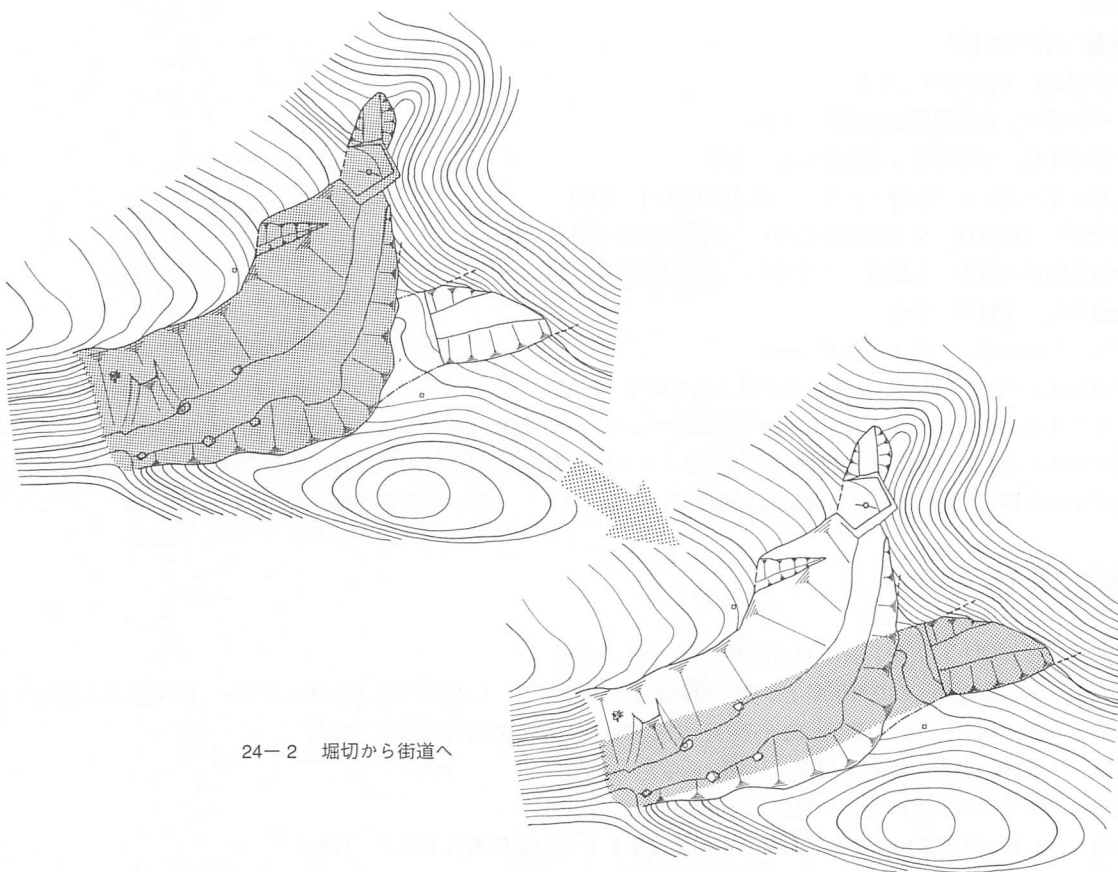
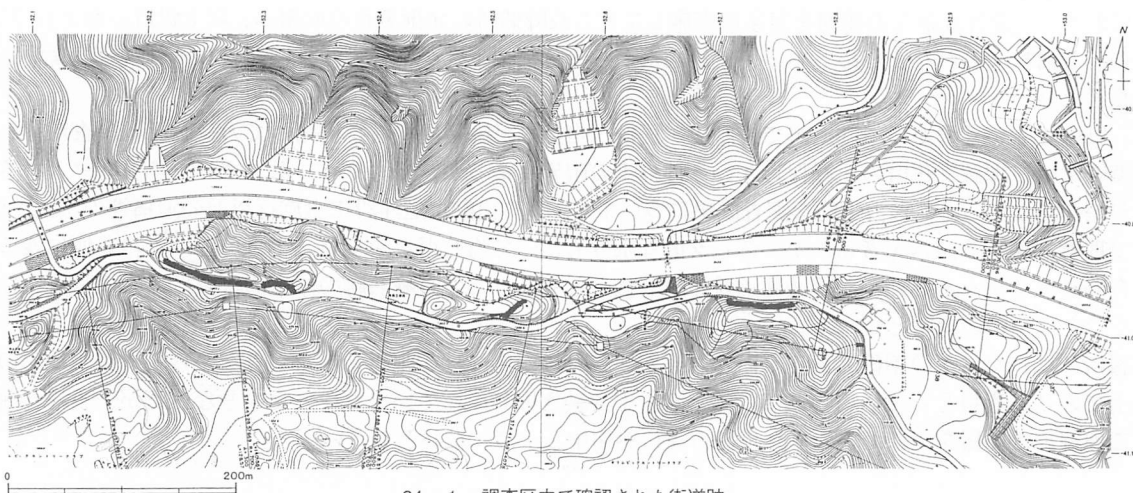
「甲州街道」においては、そうした状況は明治期になってもしばらく続いていたことは明治天皇の巡幸記などで窺い知ることができる。明治18（1885）年に国道の制度ができ、「甲州街道」が上野原―野田尻―鳥沢ルートで国道16号とされたところから、車も通行できるような道路に改良された（調査時にあった町道がそれ）と見られる。明治の後半から昭和の初め頃まで道路開削・橋梁工事などによって、現在の国道20号と同じ相模川沿いの四方津ルートが定着してからは、長峰付近の道路は、旧の「甲州街道」の位置づけとなって今日に至っている。

#### (3) 道路状遺構の検討

発掘調査の中で発見された道路状遺構、すなわち遺構としての旧甲州街道は、次ページの第24図の中に示した範囲で存在した。本来一続きであったものが、後世の地形改変などにより、遺構としては断続的な状況になった。この付近ではとくに瘦せた長峰の尾根の尾根筋よりやや下がったところを、北側を行ったり南側に出たりし、まさにつづら折りの山道となっていることがわかる。道路の幅であるが、先にも調査成果のところで報告したように（第3章第3節）、尾根を横切るところで測ってみても約1.2mで、尺貫法でいうなら4尺といえよう。尾根の斜面や鞍部に若干の掘削を加えて道路としたもので、粘土質な地山からなる路面が硬化面として確認されたのみで、石敷き等の特別な施設は確認されていない。

この道路状遺構について、直接年代を特定できるような遺物等の手掛かりは得られなかった。ただ第24図の中ほどに示したように、それまで砦の空堀であったものを改修しての道路が開かれたようであり、それは土層観察などの所見からして、江戸時代の早い時期と判断され、状況的に旧甲州街道に相当するのではないかとの見方が生まれた。さらに「大柵村絵図」に描かれた状況や地元の伝承とも整合することで結論が得られた次第である。

江戸期に入ると役割を終えた砦跡の一部を掠めて甲州海道が整備される。行き交う旅人の中には、いくつかの紀行文に書き残されているように、殊に風光明媚な景観の中にあつた長峰の地を通過する時、しばしの憩いを求めて道を外れ、砦跡の主郭部分（郭1）にあがつて、砦の時代に思いを馳せ、故事を偲んだり、あるいは単に眺めを堪能し、一服をつけたりということがあつたであろうことは想像に難くない。砦跡の郭1などから得られた遺物の中に、寛永通寶・文久永寶などの銭貨や煙管などが見られたことはそうしたことを思わせるものであるが、街道を旅するものたちの旅の憩いのみならず、甲斐から相模・武蔵へ、あるいはその逆にと、国境を越えて行く折の手向けの行為もふくまれていたと見られようことも付け加えておきたい。



第24図 旧甲州街道の確認